



宙船（そらふね）

安東 泰博*

3年ぶりに当エレクトロニクス実装学会誌の編集委員長に返り咲いています。学会員の減少、財務状況の悪化など、本学会も課題が山積していますが、魅力ある誌面を提供し皆様の期待に応えたいと思いますので、ご支援をお願いします。

さて、中島みゆきの作詞・作曲でTOKIOも歌っている「宙船（そらふね）」という曲がある。この唄が好きで、カラオケでも歌うが、なかなか音程の取りにくい唄である。歌詞が良く、特にサビの部分がすばらしい。

その船を漕いでゆけ おまえの手で漕いでゆけ

おまえが消えて喜ぶ者に おまえのオールをまかせるな

この曲を私はサラリーマンへの応援歌として当初とらえたが、さにあらず。これはサラリーマンからビジネスマンへ飛翔しろといっている唄だと思い返した。（ここで、サラリーマンとは給料で生計を立てている被雇用社員。ビジネスマンとは、英語の原義から、実業家や経営者の意味で比喩的に使っている。）

私は人生において少なくとも2回、判断ミスを犯した。重要な時期にサラリーマンであってしまった。企業に勤めていると、人事異動などで、時として進めている業務を他人に任さざるを得ないことがある。このときの私のとった行動がビジネスマンとしては失格だったと思う。担当者でなくなったのであるから、余計な口出しはすべきでないと思ってしまった。その結果、やっていた開発は私のねらっていた方向と違う方へ向かってしまい、成果の普及という面でも不十分なものになってしまった。所属が変わっても本当に重要だと信じる仕事にはタッチし続けることは可能であったと思う。その船は自分の手で漕いでいかなければならなかったのだ。研究者・エンジニアもビジネスマンのセンスをもって欲しい。己が信じる技術は、世に問い、市場に受け入れられるまで、自分の力で引っ張っていく気概をもって欲しい。

今の日本には閉塞感が漂っている。私たちの若かりし頃は追いつけ追い越せで、なりふり構わなかった。明日は今日よりきっと良くなると信じていた。「一億総中流」と言われていた時代で、日本社会は、平等で、公平で、努力した者が必ず報われる世の中ということになっていた。なればこそ、人々は勤勉を旨とし、誰もが今日より良い明日を信じて額に汗することを厭わなかった。1980年頃には一部の分野ではひょっとしてアメリカに追いついたとも感じていた。それがどうなってしまったのだろうか。

敗戦後に次々と設立されたソニー、ホンダ、京セラ、村田製作所などの新興企業が今や日本を支える大企業となっている。経済戦争に敗れつつある今こそ、日本に新たな新興企業が林立して欲しい。IT関連の起業は盛んであるが、特にハードウェアの分野で元気の良いスタートアップ企業が現れて、自分の船を漕いでいって欲しい。エレクトロニクス実装分野の若者・壮年に大いに期待したい。